

文学史科研（「多言語重層構造をなすインド文学史の先端的分析法と新記述」）

第2回運営委員会（2010年7月3日9:20～10:50、東京外国語大学・本郷サテライト7階会議室）

報告

参加委員：坂田貞二、臼田雅之、水野善文

1. 南アジア学会英文雑誌（International Journal of South Asian Studies, vol.4）Debates 欄の執筆。

<基本的考え方>

先の全体研究会で確認した1) 論集、2) 翻訳叢書、を積み重ね、究極の『インド文学史』刊行へという流れを保持しつつも、この Debates 欄執筆要請を前向きに受け入れ、Sheldon Pollock ed., *Literary Cultures in History* (2003, Univ. of California Press) 所収の 17 本の論考を、科研メンバー全員が各人の領域の論考を吟味する総力動員体勢を取ることによって、問題意識をより明確にし、今の日本に向ける『文学史』の意義を鮮明にしたい。

<具体的な作業手順>

(1) Pollock 編著の 17 本の論考につき、取りまとめ役、担当メンバーは別表の通りお願いしたい。各人、夏休み中に論文を読み、ポイントを拾っておく。（やむを得ない理由があつて取りまとめ役の任務を果たせないと判断する場合、当人の責任で、おなじ領域の他のメンバーに本人の理解を取り付けた上で取りまとめ役を委ね、運営委員会に報告してください。）

↓

(2) 取りまとめ役は、同じ言語を扱うメンバーと予め連絡の上、10月日の日本南アジア学会（10月）のさい意見交換をする。

↓

(3) 11月27日（土）（大阪？）にて開催予定の次回研究会にて、各論文につき、取りまとめ役からそれぞれのポイントを指摘してもらい全体で討議する。

↓

(4) それを受け、取りまとめ役の各人は2010年12月末までに英文（2p分=○○words以内）にて原稿を仕上げる。

（補）坂田、臼田、水野は全体を統括する。とりわけ水野は Pollock の *The Language of the Gods in the World of Men, Sanskrit, Culture, and Power in premodern India* (2006, Univ. of California Press) も配慮する。

## 2. 進行中の論集テーマにかんして

・「季節のめぐり (バーラハマーサー)」など、共通テーマをたて場合によっては共著の論文もありえる。運営委員のいずれかが音頭とりの役割を担い、適宜メンバーに声をかけて進めることとする。  
< 近日立ち上げ予定のHPの情報共有アイテムとしての有効利用をはかる。 >

## 3. HPに関して

・研究会等で報告済みの論考、レジュメの類は、一般公開するが、論集に寄稿予定のテーマ・アブストラクトなどは、外部へのアイデア盗用の懸念が拭いきれないので、メンバーだけが共有できるパスワードでアクセスできる範囲内にとどめる。